批判的社会理論とプラグマティズムの架橋？
――H.マルクーゼのデューイ論を読む――

東京大学大学院　馬渡玲欧

1　目的

本報告の目的はH. マルクーゼのデューイ論を参考にしながら、批判的社会理論とプラグマティズムの思想の特徴を比較することで、二つの思想の接点を明らかにすることにある。フランクフルト学派第一世代のプラグマティズム評価はホルクハイマーによるものが知られている。ホルクハイマーはプラグマティズムを「主観的理性」の一種とみなしており、思考を行為に還元する立場を拒否している（Deen 2010: 245）。しかし、フランクフルト学派第一世代のプラグマティズムに対する「誤解」は、ハーバマスやホネットがミード等に着目し、自身の議論に採り入れることで解消されつつある（Deen 2010: 243）。Deen は以上の背景のもとでマルクーゼのデューイ論を読み直すことで、例えばマルクーゼがホルクハイマーのように「実証主義」と「プラグマティズム」を同等視しなかったこと、マルクーゼは「科学的探究の自己反省」を考慮に入れていたがデューイは科学それ自体の反省性よりもむしろそれを適切に用いる局面を重視していたことを述べている。本報告は Deen の示唆に富む議論を踏まえつつ、マルクーゼとデューイの共通点をより掘り下げていきたい。

2　方法

本報告ではマルクーゼが書いた、デューイの *Theory of Valuation*（1939 年）に対する書評、また『理性と革命』（1941 年）の「実証主義」社会理論に関する思想史に着目し、とりわけ同書評にあらわれる「実証主義」概念によってマルクーゼがデューイの議論との異同をどのように測定していたかを考察の手がかりとする。

3　結果・結論

マルクーゼの考えによればデューイは「科学は自由である」とする至上の価値を抱いているが、そのような態度は、価値判断を無効とする「実証主義」とは相容れない。人間を自由へ導くとされる「批判的理性」を「実証主義」が失っていったことを指摘したマルクーゼは、デューイの科学観に「実証主義」が失った契機を見出していたように思われる。

文献

Marcuse, Herbert, 1941, “Review of John Dewey's Theory of Valuation” *Zeitschrift für Sozialforschung*, 9: 144-8.

Deen, Philip, 2010, “Dialectical vs. Experimental Method: Marcuse's Review of Dewey's Logic: The Theory of Inquiry", *Transactions of the Charles S. Peirce Society*, 46(2): 242-57.